文学部で何を学ぶか、いかに学ぶか

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長
村本　由紀子

何を学ぶか：まずは「好きなこと」を大切に考える

研究者は往々にして、「好きなことがそのまま仕事になった」と口にしますが、文学部の教員からもしばしば、そのような幸福な発言が聞かれます。

「史料を読むのに夢中です。ほぼ毎日、新しい史料を見ては、時が経つのを忘れています」（日本史学）。「考古学の研究は、（中略）とにかく根気が求められます。長丁場の発掘調査は体力を削ります。それをやり続けられるのは、単純に楽しいから、そしてやりがいがあるからという理由にほかなりません」（考古学）。「子供の頃から中国の古いものが大好きで、結局それを生業にしてしまいました」（中国語学）。「（夢中になっているのは）活字の世界です。五十年経ってもそこから抜け出られません。本を不意に手に取って、読みはじめるとやめられない」（フランス文学）。「史料や資料に基づいて、ある事柄について推理を働かせ、さらに調べを進めていく作業（中略）は、寝食を忘れるほど楽しいもので、一生を賭けて悔いがないと思えるプロジェクトも多くあります」（社会学）。等々…。

上記はいずれも、文学部ウェブサイトの特集コンテンツ『文学部のひと』（https://www.l.u-tokyo.ac.jp/personage/）で紹介されている教員の言葉です。文学部教員の多くが、研究テーマはもとより、その探究のプロセスにも夢中になって、一心に研究に取り組んでいます。

文学部に進学した学生のみなさんは、教員がどんなことにどんなふうに夢中になっているのかを、授業を通じて直接に教わり、あるいは研究者としての姿を目にする中で感じ取りながら、やがてその醍醐味を共有していくことになるでしょう。あちこちで説明されている通り、文学部には 27 もの専修課程があります。「役にたつ」「ためになる」といった不確かな評判はいったん脇に置いて、まずは好奇心の赴くままに、自身が夢中になれそうな学問分野の扉をノックしてみることをお勧めします。

いかに学ぶか：好きなことの先に「普遍的な問い」を見出す

まずは「好き」を大切に、と書きましたが、好きなことを好きなように学ぶ、ただそれだけで、文学部での学びが完結するわけではありません。掲げた問いを自分だけのものに留めず、研究上の問い（リサーチ・クエスチョン）に昇華させること。その問いに対する探究を、個人的な満足のためだけでなく、学術的・社会的貢献をも目指しながら実践すること。授業や卒業論文指導を通じて、徐々にその力を身につけていきましょう。

個々の研究における問いは、多くの場合「微視的（micro）」です。ある時代・ある地域で一つの事象が生じた理由、一人の作家がある作品に込めた思いなど、個別的で局所的な問いに、しばしば焦点が当てられます。しかし、それらの問いに答えを得るには、対象そのものに対する微視的探究を超えて、対象を取り巻く時代背景や社会構造など、多層的な環境の特質とその歴史的変化に目を向けることが求められます。異なる時代、異なる地域との比較検討も必要です。このとき、自らの問いと、別の時代や地域に関心を持っている他者の問いとが重なり合います。

その他者は、同じ学問分野の仲間かもしれませんし、別の学問分野で学ぶ人かもしれません。たとえば、私の専門は社会心理学ですが、「ある社会に生きる人々がある共通の心理・行動傾向を示すのはなぜか」という問いについて考える際には、歴史学や宗教学、社会学、文化人類学、地理学などの知見にも大いに助けられます。探究の裾野を拡げ、「巨視的（macro）」な視点を持つことで、個別具体的な関心に根差した問いが徐々に相対化され、普遍性を帯びてきます。すなわち、一つの社会の人々の生き方についての探究が、やがて、人間の心と社会環境との持続可能な相互構成過程に関する新たな示唆をもたらしてくれるのです。

文学部での学びの過程には、ゼミや研究会など、自分の問いを他者の問いとすり合わせ、互いの視点を交差させる機会が多くあります。知的刺激に満ちたそれらの経験を通じて、自身の「好き」から生まれた小さな問いが、「人間とはいかなる存在か、人間と環境はいかに関わり合うか」といった大きな問いに繋がっている、と感じられる瞬間が訪れるかもしれません。その時にこそ、文学部での学びが（単なる実用性とは異なる次元で）「役にたつ」という確かな実感を得ることができるはずです。今、私たちの生きるこの社会が抱える諸問題に対して、文学部の学問がどのように、そしてどこまで貢献しうるのか、是非確かめにいらしてください。